



「博多っ子純情」6巻で田川が登場。炭鉱閉山後の町並みが描かれています。



単行本34巻分の連載が完結して約30年。「中学生編」の新装本が再出版されるなど、いまだ注目度の高い作品です。



漫画家 長谷川法世さん

▶昭和20年9月、赤池生まれ博多育ち。23歳で漫画家デビューし東京で活動。約7年間「博多っ子純情」を連載。NHK連続テレビ小説「走らんか!」原作。平成15年、博多町家ふるさと館の館長に就任。

博 多を舞台に主人公・郷六平の思春期の物語を描き、昭和51年の連載開始から、博多の地名を全国に広めた漫画「博多っ子純情」。現在「博多通りもん」のテレビCMで、六平らの映像と共演している作者の長谷川法世先生は、実は福智町と深いつながりがありました。

「赤池のボタ山」の記憶

博多弁を駆使し、誰もが体験する思春期の甘酸っぱい物語を描いて人気を呼んだ「博多っ子純情」。その中に、主人公の郷六平が田川を訪れる話があり、六平がボタ山から見下ろした風景が、見開きを大

変幻自在で繊細かつ優雅な音色が特徴です。このリュートの演奏家を目指し、40年前に国境を越えてスイスに渡った大島秀文さんは、当時の心境を「音楽の父・バッハの音楽に魅せられ、バッハがリュートのために手がけた曲を弾いてみたかった」と振り返ります。

は演奏活動を始めます。「聴く人の心を揺さぶる音楽を生み出すために、学校で演奏する以外にも毎日最低3時間は練習していました」と話す大島さんは、プロとして活動を始めて以降、音楽教室で教鞭をとりながら、2年に1回のペースで日本ツアーを開催。たくましい指を巧みに動かして繰り出される優雅で情緒あふれる音色は、国内外に多くのファンを作り、指導した教え子は千人を超えています。

音楽には国境も終着点もない。生涯「夢」を追い求め続けます。

ヨーロッパ中世時代に生まれ、ギターのような形をしている古楽器リュート。音量は小さいですが、

スイスの音楽学校「ムジックアカデミー」に入学した大島さんは、当時のリュート奏者を代表する「オイゲン・ミューラー・ド・ボンボア」に師事。すぐに頭角を現し、31歳時に

ス イスに渡り、音楽学校で教鞭をとりながら、リュート奏者として40年活動してきた大島秀文さん。当時名もない青年が、世界を股にかけて活躍する演奏家へと成長した、その軌跡を探ります。

パッサ研究のためにリュートに持ち替えた当時の大島さん。失敗を恐れずに前を向き、夢に向かって一心不乱に歩み始めました。

「音楽には終着点がありません。生涯、尊敬してやまないバッハの音楽を追い求め続けます」と語る大島さん。「帰郷したときには、いつも親族や支えてくれる仲間が温かく迎えてくれる。ここは私の原点であり、心より所です」と故郷への想いを目を細めて話します。昨年

11月に帰郷したときは約40年ぶりの紅葉を満喫。「心が安らぎ、英気を養えました。次に戻って来たときは福智町のみなさんにもリュートを知ってもらいたいの、ここでコンサートを開きたい」そうメッセージを残し、また、夢を追い求めて町を後にしました。



演奏家 大島秀文さん

▶神崎出身、スイス在住のリュート奏者。24歳でバッハに憧れ、スイスに渡ってリュートを始める。34歳で演奏家として独立。現在、音楽教室で教鞭をとりながら世界各国でコンサート活動を行う。



95年にCDを初リリース。現在、大島さんの思いが詰まった3枚を発売中。



先端が直角に曲がり、26本の弦が張られた自前のリュートを、巧みな技術で操り、美しい調べを奏でる大島さん。

望み続けるということ

23歳で漫画家となった長谷川先生は、その後の方向性に悩みました。「まず漫画家になる夢は叶えた。それからどう頭角を現すかと考えた時に、どのジャンルにもすでに巨匠がいて、自分が出ていく場所が無いことに気付き、呆然としました。しばらく悩んだ末「漫画は標準語」というそれまでの既成概念を破り、「自分しかできないふるさと」の話を

いつでも帰れるふるさとがある…。そう思えばどんな冒険もできる。

という長谷川先生。当時、町は炭で真っ黒、三角のボタ山からは煙が出ていたこともあったといいます。

描く」と決意。その後、運命的に地元の話を描かないかと提案され「博多っ子純情」開始につながりました。

「漫画で赤池の話を描こうと思っただころ、ちょうど『美味しんぼ』などの原作者・雁屋哲さんが赤池で過ごしたことがあると知り意気投合。一緒に赤池を訪れました。町はずっかり変わっていました。お互い郷愁に浸りましたよ。」



雁屋哲先生原作の「美味しんぼ」

「強く望み続ければ運命をも引き寄せられますが、逆に望まなければチャンスにも気付けません。私は故郷への思いを持ち続け、成功をつかむことができました。子どもたちはぜひ一生懸命遊び、故郷の情景を心に焼き付けておいてください。いつでも帰れる場所がある…そう思えばどんな冒険もできるはずですよ。」